

(別紙資料)

【研究の背景】

- ・ 有明海で重要な漁獲対象となっているタイラギは 1961 年には 3 万 5 千トンの漁獲があったが、その後減少し、2000 年以降はほとんど漁獲がない状態が続いており、漁家経営に深刻なダメージを与えている。
- ・ タイラギは殻長が漁獲サイズとなる 10cm 位までは比較的生き残っているが、夏場に、砂から出て貝殻を立たせたまま大量にへい死する現象(立ち枯れ死)がみられ、漁獲に至らない場合が多い。この現象は特に水深が 10 m 以深の潜水器を用いて漁獲する漁場で多く観察されている。
- ・ 地域特産種として重要なタイラギのへい死原因を解明するとともに、養殖等の生産増大のための対策技術を開発することが有明海の漁業振興の上から重要な課題として求められている。

【研究の内容・特徴】

水産総合研究センターでは有明海を担当している西海区水産研究所を中心に、関係 4 県(福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県)の水産試験研究機関、田崎海洋生物研究所、小長井町漁業協同組合と連携し、3 つの研究の柱を据えてタイラギの大量死の原因解明や生産の増大に向けた研究開発を今年度から 5 年間の予定で開始した。

課題1:大量死の原因解明

予算:運営費交付金

研究期間:平成 18 年度

参画機関:水産総合研究センター、福岡県水産海洋技術センター有明海研究所、佐賀県有明水産振興センター、熊本県水産研究センター

協力機関:長崎県総合水産試験場

内容:大量死に関与する可能性のある要因のうち、貧酸素等の環境条件や食害などが調査されてきたが、本課題では、これまでなされてこなかった病原体の関与の可能性について検討する。研究成果は大量死防止技術の開発や増養殖適地の選定に役立てられる。

課題2:好適漁場環境の解明

予算:運営費交付金

研究期間:平成 18 年度~22 年度

参画機関:水産総合研究センター

協力機関:福岡県水産海洋技術センター有明海研究所、佐賀県有明水産振興センター、長崎県総合水産試験場、熊本県水産研究センター

内容:有明海では海中に浮泥が大量に分布し、潮の干満などに伴って堆積、懸濁を繰り返しているが、これら懸濁物やプランクトンなどがタイラギの餌としてどの様な価値を持つかを明らかにし、餌や底質からみたタイラギ漁場の特性を解明する。研究成果は、漁場造成や移植、種苗放流の際の適地選定などに役立てられる。

課題3:タイラギの養殖技術の開発

予算:農林水産省委託研究「先端技術を活用した農林水産研究高度化事業」

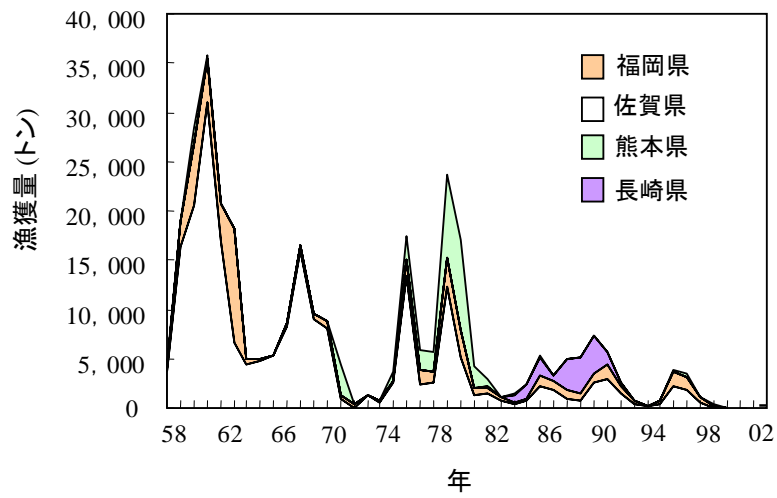
研究期間:平成 18 年度~20 年度

参画機関:水産総合研究センター、長崎県総合水産試験場、田崎海洋生物研究所、小長井町漁業協同組合

協力機関:佐賀県有明水産振興センター

内容:人工的に稚貝を作る技術を確立し、生産された稚貝を用いて、海面からタイラギを海中に吊して養殖する技術を開発する。この養殖技術は実際の養殖現場への普及を考慮し、種苗生産から飼育管理などの作業効率、施設の耐久性などまで、養殖するための一連の工程をシステム化する点に特徴がある。開発された技術は直ちに産業へ応用可能であり、タイラギを貧酸素などの底層の環境悪化やエイなどの食害から守り、安定的な生産が期待できる。

これらの一連の研究により、漁場造成、移植、種苗放流等による資源増大や新たな養殖システムによる総合的なタイラギの生産増大に貢献できるものと期待される。



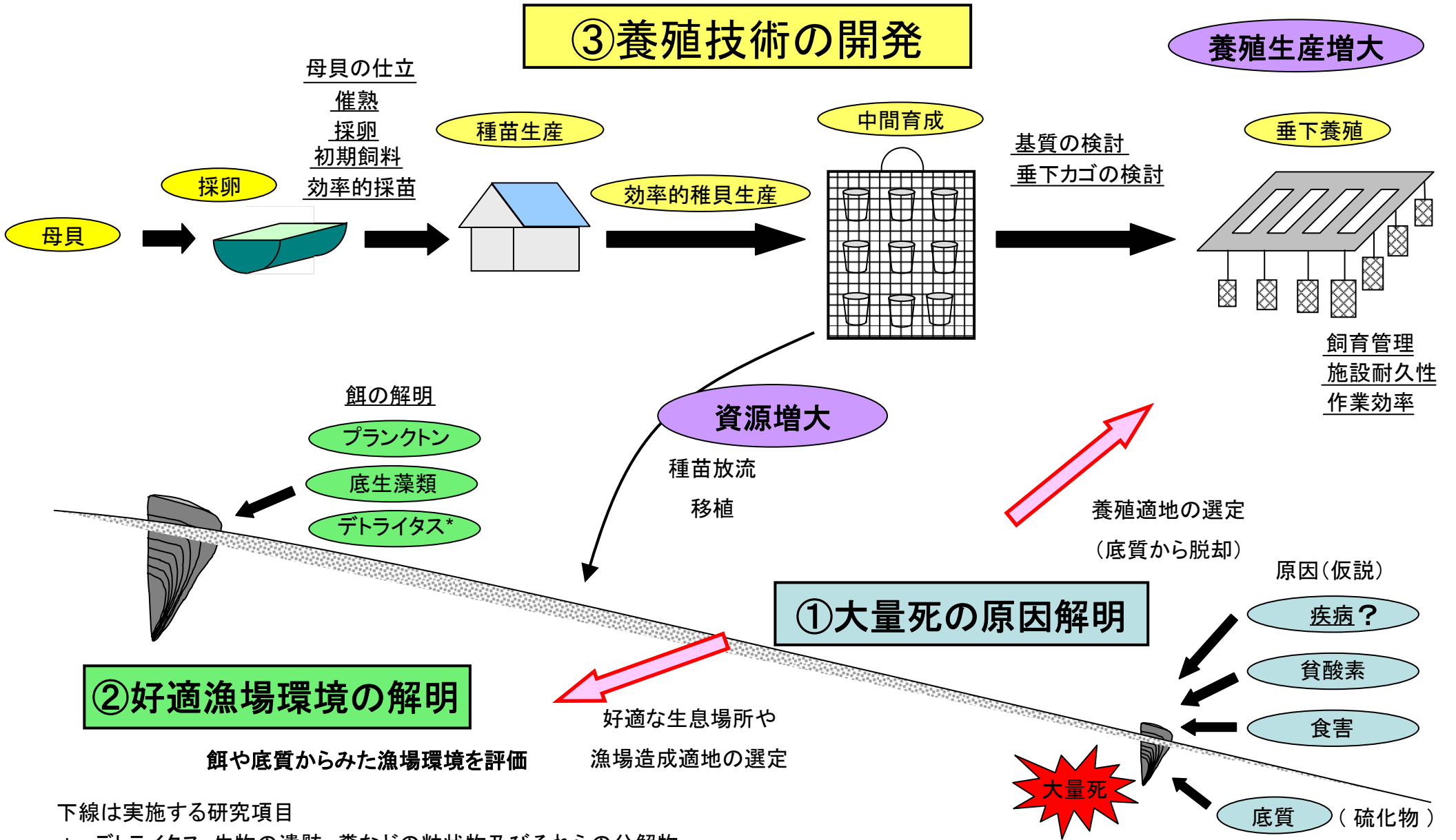
有明海におけるタイラギ漁獲量の経年推移
(1958～2002年)



立ち枯れ死したタイラギ

タイラギの生産増大に関する研究開発の枠組み

③ 養殖技術の開発



下線は実施する研究項目

* デトライタス: 生物の遺骸、糞などの粒状物及びそれらの分解物